

# 大学受験経験とキャリア選択自己効力感 およびキャリア選択結果期待の関係<sup>1),2)</sup>

秋山 史子\*

Relationship between Experiences of University Entrance Examination,  
Career Choice Self-Efficacy and Career Outcome Expectations

Fumiko AKIYAMA\*

The purpose of this study was to examine the relationship between university entrance exam experiences and career choice self-efficacy (CCSE) and career outcome expectations (COE). Participants were 227 undergraduate students. First, the University entrance exam Experiences Scale (UEs) was developed. Factor analysis revealed 3 factors were obtained: "effort experience", "anxiety during preparation for entrance exam", and "dissatisfaction with results". A hierarchical multiple regression analysis indicated that "goal selection", "planning", and "degree of independence in decision making" in CCSE were significantly positively related to "effort experience", and negatively related to "anxiety during preparation for entrance exam". "Information gathering" was positively associated with "effort experience", and "dissatisfaction with results". However, COE showed little association with the UEs. These results suggested that university entrance exam experiences, especially effort experience in the process of university acceptance, was important for career choice self-efficacy.

**key words:** experiences of university entrance examination, career choice self-efficacy, career outcome expectations

## 問題と目的

大学生のキャリア選択に関する研究では、Bandura (1977) が提唱した自己効力感 (self-efficacy) の概念を用いた研究が盛んに行われてきた。キャリア

選択自己効力感とは、ある特定の分野を自分の進路として選択する過程において、必要な具体的行動をどの程度うまく遂行できるかという信念である (廣瀬, 1998)。高いキャリア選択自己効力感が積極的な就職活動への取り組みや職業決定に繋がることが明

<sup>1)</sup> 本論文は平成 26 年度学習院大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文の一部および 31st International Congress of Psychology での発表内容を再分析、再構成したものである。

<sup>2)</sup> 調査にご協力いただきました大学生の皆様、執筆にあたりご指導いただきました学習院大学文学部心理学科竹網誠一郎教授、学習院大学人文科学研究所客員所員小菅清香先生にこの場をお借りして深謝申し上げます。

\* 学習院大学文学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Letters, Gakushuin University, 1-5-1 Mejiro, Toshima-ku, Tokyo 171-8588, Japan.

(fumiko.akiyama@gakushuin.ac.jp)

らかとなっている(富永, 2008)。もし大学生のキャリア選択自己効力感を高めることができるなら, それは極めて有用なことであり, 学生のキャリアガイダンス上でも意義のあることである。しかし, 富永(2008)が指摘するように, キャリア選択自己効力感を高める要因を明らかにした研究は, ほとんど見られない。

佐藤(2013)は就職活動を終えた大学4年生を対象に, 就職活動中の遂行達成経験とキャリア選択自己効力感との関係を検討している。その結果, 遂行達成経験が豊富な大学生ほどキャリア選択自己効力感が高いという, 有意な正の相関関係を明らかにした。この研究はキャリア選択自己効力感を高める要因を検討した数少ない研究の1つである。しかし, この研究では実際の就職活動を遂行達成経験と定義していることから, 就職活動に先行して経験された遂行達成経験とキャリア選択自己効力感の関係について明らかになっていない。この関係を明らかにするためには, 就職活動が終了する前あるいは就職活動を始める前の大学生を対象にこの点を検討する必要があるだろう。

就職活動に先行して経験された遂行達成経験として, 大学受験の経験があると考えられる。堀井(2017)は教員養成系国立大学の大学生を対象に, 就職活動開始以前の経験として大学受験のとらえ方に着目した。堀井(2017)は大学受験を取り上げた理由として, ほとんどの大学生に共通して経験した困難を伴う経験であること, 大学生にとっての就職活動と同じく高校時代のキャリア選択活動であること, そして, 大学生のさまざまな経験の中でも特に重要なものであることを挙げている。分析の結果, 大学受験のとらえ方が大学入学後のキャリア選択自己効力感と関連していることが明らかとなった。しかし, この研究では大学受験のとらえ方とコーピングの得点をもとにクラスター分析を行って群分けをするアプローチを行っているため, 大学受験とキャリア選択自己効力感の2変数間の関係をダイレクトに検討したのではない。

本研究では, 大学受験に向けた受験勉強期間にのみ焦点を当てる。本研究の第1の目的は, 大学受験経験と大学生のキャリア選択自己効力感の関係を検討することである。大学受験と大学生の就職活動は異なる活動であるように考えられる。しかし, ライフイ

ベントという観点からみれば, それぞれの活動はその時期の最重要課題という点で共通している。この点が, 大学受験経験がキャリア選択自己効力感と関連するのではないかと考える理由である。

本研究では, 自己効力感の情報源について検討した研究を参考に, 大学受験経験を測定する尺度を新たに作成する。安達(2006)は, 仕事活動に対する自己効力とBandura(1977)で仮定されている4つの情報源, すなわち遂行達成経験, 代理経験, 言語的説得および情動的喚起を測定する尺度を作成し, 4つの情報源と自己効力感の関係を検討した。その結果, 遂行達成経験に該当する個人的達成と情動的喚起にあたる特性不安およびオプティミズムが自己効力感と関連したことを示した。Usher & Pajares(2009)は中学生の数学の自己効力感に関する4つの情報源を測定する尺度を開発し, 自己効力感との関係を調べたところ, 遂行達成経験, 代理経験, 言語的説得と自己効力感に正の相関, 情動的喚起と自己効力感には負の相関がみられた。それぞれの研究は仕事活動や数学の自己効力感の情報源を検討するものであったものの, 遂行達成経験の測定項目をはじめ本研究の尺度作成に有用な項目が多く含まれていたため, これら2つの先行研究を参考に尺度を作成することとする。

本研究では, キャリア選択自己効力感だけでなく, キャリア選択結果期待にも着目する。Bandura(1977)は, 行動と結果の随伴性認知としての結果期待だけで人の行動が決まるわけではなく, その行動をどれくらい成功裏に達成できるかという効力期待(自己効力感)も重要であることを指摘し, 自己効力理論を提唱した。そして, 課題に取り組む際, 結果期待と効力期待の両者が高い場合に, 人は高い動機づけを持って粘り強く課題に取り組むと予測された。この予測は多くの実証的研究で明らかにされている。Betz & Vuyten(1997)は, キャリア選択自己効力感および結果期待が職業探索意図と職業未決定に及ぼす影響を検討している。その結果, 自己効力感は職業未決定に負の影響を示し, 結果期待は職業探索意図に対して正の影響を及ぼすことを明らかにしている。また, 安達(2001)は, 就業動機と自己効力感を統制した後もキャリア選択結果期待が職業探索意図に独自の説明力を有することを示した。これらの研究は, 結果期待が就職活動に必要な行動にポジ

ティブな影響があることを示したものである。以上から、本研究の第2の目的は、大学受験経験とキャリア選択結果期待の関係を検討することである。

大学受験を取り上げるにあたっては、大学入試の形態を考慮する必要がある。大学入試の方式は一般入試に加え、系列高校からの内部進学や指定校推薦など多様な入試形態がある。特に私立大学の入学者の中では一般入試に加え、指定校推薦(学校推薦型入試)を経た入学者の割合が高くなっている(文部科学省, 2014)。さらに、系列高校からの内部進学による入学者も私立大学の入学者の中では一定の割合を占めていると考えられる。以上から、本研究ではこれら3つの入試形態を用いて入学した大学生に焦点を当てることとする。また、就職活動を経験したことによりキャリア選択自己効力感が影響される問題を避けるため、1年生から3年生を対象とする。

以上より、本研究は一般入試、系列高校からの内部進学、そして指定校推薦を経て大学に入学した大学1~3年生を対象に、大学受験経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関連を検討することを目的とする。

## 方 法

### 調査時期と手続き

2014年10月~11月、関東圏内の私立の総合大学であるA大学とB大学で調査を行った。A大学では教養科目の心理学の授業と心理学科の専門科目の授業、B大学では教養科目の心理学の授業において、質問紙の一斉配布によって調査を行った。所要時間は15分程度であった。

### 倫理的配慮

本研究は日本応用心理学会倫理綱領、および投稿倫理規程を満たす形で実施され執筆された。調査に先立って、質問紙への回答は任意であること、調査内容は個人を特定しない形式で統計的に処理されること、当該授業の内容や成績評価とは一切関係がないこと、プライバシー遵守に関する事項の口頭説明に加え、質問紙にも記載した。その上で回答への協力に了承した者から回答を得た。

### 調査参加者

大学生265名から回答を得た。欠損値の多い3名、4年生以上と回答した14名、年齢「30歳以上」1名、学年または年齢に無回答の8名、一般入試、系列

高校からの進学、指定校推薦以外の入試形態と回答した12名の計38名を除外した。その結果、分析対象となった回答は227名(A大学138名、B大学89名)であった。性別は女性116名、男性111名、年齢「20歳未満」98名、「20~24歳」129名であった。学年は1年生88名、2年生60名、3年生79名、入試形態は一般入試(センター試験等含む)が153名、大学の系列高校からの進学26名、指定校推薦48名であった。

### 使用尺度の構成

**大学受験経験** はじめに大学受験経験を測定する項目を作成した。項目作成の際には、自己効力感の情報源を扱った先行研究(安達, 2006; Usher & Pajares, 2009)を参考にした。大学受験という経験を現在どのように感じているのかについて、大学入試の結果に満足しているか、一生懸命に努力した経験か、そして受験勉強や受験では不安やストレスを経験していたかなどを中心に項目を作成した(Table 1参照)。表現内容や教示文に関して、心理学を専門とする教員1名と大学院生2名に内容的妥当性の確認を行った。その結果、内容的妥当性があると判断された22項目を採用した。回答は5段階評定(5=あてはまる~1=あてはまらない)であった。

**キャリア選択自己効力感** 花井(2008)のキャリア選択自己効力感尺度(Career Choice Self-Efficacy Scale: 以下, CCSE) 25項目を使用した。この尺度は就職活動や職業選択過程に必要な行動をどの程度行えると確信しているかを問うもので、「自己評価」(項目例: 自分の性格を理解すること。), 「目標選択」(項目例: 将来, になりたい自分を明確にすること。), 「計画立案」(項目例: 就職活動について具体的な計画を立てること。), 「情報収集」(項目例: 自分の職業選択に必要な情報を得るために, 新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。), 「意思決定の主体性度」(項目例: 就きたい職業に就けるのであれば, 少々の苦労でも我慢すること。)の5因子から成る。回答は4段階評定(4=自信がある~1=自信がない)であった。

**キャリア選択結果期待** Betz & Vuyten (1997)を邦訳した安達(2001)の進路選択に対する結果期待尺度4項目を使用した。この尺度は職業選択に必要な行動を行えば, よりよい結果が得られると感じている程度を問うものである。項目例として“自分の興味

Table 1 大学受験経験尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量			M	SD
	F1	F2	F3		
F1：大学受験の努力経験 ( $\alpha = .88$ )					
19 大学に入るために、私は一生懸命勉強していた。	.75	.03	.04	3.35	1.27
7 受験勉強では目標に向かって計画的に勉強した。	.74	-.03	.02	2.78	1.22
16 大学に合格したのは、最後まで諦めずに勉強を頑張ったからだ。	.74	-.01	-.16	2.98	1.24
13 受験勉強では自分に合った現実的な計画を立てて取り組んだ。	.70	.01	-.03	2.84	1.12
3 大学受験であれだけ一生懸命取り組んだのだから、これから直面する課題も乗り越えられるだろう。	.69	-.07	-.06	2.74	1.09
8 自分の得意な分野、苦手な分野が何なのかを分析して受験勉強をした。	.67	-.01	.25	3.27	1.19
22 受験で第一志望に合格するためなら、どんな困難にも立ち向かった。	.66	-.01	-.01	2.58	1.06
17 受験に必要な科目だったので、苦手科目も一生懸命取り組んだ。	.53	.16	.06	3.19	1.25
F2：大学受験期不安 ( $\alpha = .84$ )					
15 大学受験で失敗してしまうのではないかと、よく不安になっていた。	.00	.88	-.02	3.47	1.26
18 受験勉強に取り組むことを考えると、よく憂うつになっていた。	.00	.75	-.02	3.06	1.32
2 大学受験のことを考えると不安でたまらなかった。	.11	.74	-.11	3.50	1.37
9 受験勉強をしている間は落ち着かないことが多かった。	-.10	.68	.17	3.09	1.25
F3：大学受験結果の不満足度 ( $\alpha = .85$ )					
1 今から振り返ると、大学受験の結果は満足したものだった。*	.11	.05	-.88	3.13	1.36
4 思い返してみると、大学受験はうまくいかなかった。	-.08	.07	.85	2.95	1.34
21 一生懸命勉強していたにも関わらず、大学受験の結果は思わしくなかった。	.24	-.03	.74	2.59	1.19
	因子間相関	F2	.40	—	
		F3	-.14	.26	

注) \*：逆転項目

や能力を理解すれば、よりよい職業選択が出来るだろう”であった。回答は5段階評定(5=あてはまる～1=あてはまらない)であった。

フェイスシート 質問紙の最後に、性別、年齢(20歳未満、20歳～24歳、25歳～29歳、30歳以上から選択)、学年、現在通っている大学の入学試験で利用した入試形態を尋ねた。

## 結 果

### 大学受験経験尺度の因子分析

はじめに、大学受験経験尺度の探索的因子分析を行った。天井効果、床効果が確認された2項目を除いた20項目を対象に最尤法による分析を実施した。固有値の減衰状況(5.60, 3.43, 1.72, 1.35, 1.00…)と因子の解釈可能性から3因子構造を採用しプロマックス回転を行った。因子負荷量が.45以下を示した4項目と複数因子に因子負荷量.45以上を示した1項目を除外し、最終的に15項目を採用した(Table 1)。回転前の累積寄与率は3因子で46.45%であった。

第1因子は“項目19：大学に入るために、私は一生懸命勉強していた。”や、“項目7：受験勉強では目

標に向かって計画的に勉強した。”といった大学合格という目標達成のために前向きに、そして粘り強い努力をもって取り組んだ経験を表していることから「大学受験の努力経験」(以下、努力経験)と命名した( $\alpha=.88$ )。第2因子は“項目15：大学受験で失敗してしまうのではないかと、よく不安になっていた。”、“項目18：受験勉強に取り組むことを考えると、よく憂うつになっていた。”など大学入試や受験勉強期間に経験した不安やネガティブな情動経験に関する4項目に負荷が高かったことから、「大学受験期不安経験」(以下、受験期不安)とした( $\alpha=.84$ )。第3因子は“項目1：今から振り返ると、大学受験の結果は満足したものだった。”や“項目4：思い返してみると、大学受験はうまくいかなかった。”のように大学受験の結果に関する主観的な評価を表していることから「大学受験結果の不満足度」(以下、結果の不満足度)とした( $\alpha=.85$ )。「結果の不満足度」には逆転項目が含まれていたため、以降の分析では得点が高いほど結果の不満足度が高くなるよう処理をして用いた。

### キャリア選択自己効力感尺度およびキャリア選択結果期待尺度の信頼性分析

キャリア選択自己効力感尺度は、花井(2008)で構成された5因子構造に基づいて各因子の信頼性分析を行ったところ  $\alpha = .73 \sim .89$  と十分な値を示したため、花井(2008)の5因子構造をそのまま用いることとした。キャリア選択結果期待は全4項目と項目数が少ないことから、信頼性係数のみを求めた。その結果  $\alpha = .77$  と高い値を示した。以降の分析では、大学受験経験、キャリア選択自己効力感の両尺度は下位尺度の平均値を、キャリア選択結果期待は全4項目の平均値を分析に使用した。

### 尺度間の相関

大学受験経験、キャリア選択自己効力感および結果期待、ダミー変数処理を行った各プロフィール項目の平均値、標準偏差ならびに各尺度得点間の相関係数を Table 2 に示した。大学受験経験とキャリア選択自己効力感との相関係数を見ると、「努力経験」が「意思決定の主体性度」 $r = .36$ 、「計画立案」と  $r = .34$ 、「情報収集」と  $r = .27$ 、(いずれも  $p < .001$ ) の中程度の有意な正の相関、「目標選択」 $r = .18$  ( $p < .01$ ) とは弱い正の相関が示された。「結果の不満足度」と「意志決定の主体性度」においては  $r = -.14$  ( $p < .05$ ) と負の有意な相関が得られた。大学受験経験とキャリア選択結果期待の相関は「努力経験」のみ有意な正の相関が示された ( $r = .18$ ,  $p < .01$ )。キャリア選択自己効力感の各因子とキャリア選択結果期待の相関では、「意思決定の主体性度」( $r = .30$ ,  $p < .001$ )、「情報収集」( $r = .19$ ,  $p < .01$ )、「計画立案」( $r = .16$ ,  $p < .05$ ) の有意な正の相関が示された。

以上の結果から、大学受験経験のうち「努力経験」がキャリア選択自己効力感と正の相関があること、「努力経験」はさらにキャリア選択結果期待とも正の相関があることがわかった。

### 階層的重回帰分析

大学受験経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関係を検討するため、キャリア選択自己効力感と結果期待を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。Step1 にはダミー変数処理を行ったプロフィール項目(大学、性別、学年、大学入試の際に利用した入試選抜方法)を説明変数として投入した。Step2 には大学受験経験の3因子を説明変数として投入した。分析の結果を Table 3 に示した。

Step2 で  $R^2$  値の増分が有意であったのは、キャリア選択自己効力感の「目標選択」( $\Delta R^2 = .07$ ,  $p < .001$ )、「計画立案」( $\Delta R^2 = .21$ ,  $p < .001$ )、「情報収集」( $\Delta R^2 = .11$ ,  $p < .001$ )と「意思決定の主体性度」( $\Delta R^2 = .21$ ,  $p < .001$ )であった。「目標選択」、「計画立案」、「意思決定の主体性度」は大学受験経験のうち「努力経験」がそれぞれ正の関連を示し、特に「計画立案」( $B = .39$ ,  $SE = .05$ ,  $\beta = .52$ ,  $p < .001$ )、「意思決定の主体性度」( $B = .38$ ,  $SE = .05$ ,  $\beta = .52$ ,  $p < .001$ )が高い関連を示した。「目標選択」、「計画立案」、「意思決定の主体性度」は「受験期不安」と負の関連が得られたが、「結果の不満足度」とは有意な関連が見られなかった。「情報収集」は「努力経験」に加え、「結果の不満足度」と正の関連が見られたが、「受験期不安」との有意な関連は見られなかった。一方、キャリア選択自己効力感の「自己評価」とキャリア選択結果期待は「努力経験」との正の関連が示されたが、Step2 での  $R^2$  変化量が有意ではなかった。

これらの結果から、キャリア選択自己効力感の下位尺度のうち「目標選択」、「計画立案」、「意思決定の主体性度」、「情報収集」が大学受験経験と関連し、特に「努力経験」と強い正の関連があることがわかった。

## 考 察

本研究では、就職活動前の大学生を対象に、大学受験経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関連について検討することを目的とした。

大学受験経験とキャリア選択自己効力感およびキャリア選択結果期待の関連を示した Table 3 から、「努力経験」がキャリア選択自己効力感と正の関連があることが明らかになった。大学受験のために計画的に勉強し、苦手な科目も諦めずに取り組んだ経験が、これから経験することになる就職活動の行動(目標選択、計画立案、情報収集および意思決定の主体性度)をうまくやり遂げられるという確信へと繋がることを示した。また、「受験期不安経験」がキャリア選択自己効力感の3つの行動(目標選択、計画立案および意思決定の主体性度)と負の関連がみられ、大学受験で失敗することに不安などのネガティブな情動を経験していたことが、就職活動に必要な行動をうまく遂行できないという信念に繋がることを示した。キャリア選択自己効力感を高める要因を明ら

Table 2 各尺度得点の平均値, 標準偏差および相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	M	SD
1 努力経験	—														3.00	.87
2 受験期不安	.36***	—													3.29	1.07
3 結果の不満足度	-.12	.21**	—												2.77	1.14
4 自己評価	.12	-.04	-.07	—											2.74	.59
5 目標選択	.18**	-.09	-.01	.45***	—										2.56	.61
6 計画立案	.34***	-.09	-.07	.45***	.60***	—									2.34	.66
7 情報収集	.27***	.03	.04	.42***	.52***	.55***	—								2.69	.49
8 意思決定の主体性度	.36***	-.10	-.14*	.32***	.57***	.58***	.41***	—							2.77	.63
9 結果期待	.18**	.13	-.03	.11	.10	.16*	.19**	.30***	—						3.92	.61
10 大学 (0=A大学, 1=B大学)	-.24***	-.20**	.10	-.12	-.01	.08	-.03	-.03	-.08	—					0.39	.49
11 性別 (0=男性, 1=女性)	.00	.10	.00	.07	-.13	-.11	-.06	-.02	-.02	-.15*	—				0.51	.50
12 1年生ダミー	.19**	.09	-.09	-.10	-.16*	-.11	-.13*	-.04	-.04	-.64***	.02	—			0.39	.49
13 2年生ダミー	-.24***	-.14*	.06	-.11	.03	.08	.03	-.01	-.09	.73***	-.09	-.48***	—		0.26	.44
14 一般入試ダミー	.26***	.27***	.38***	-.04	-.05	-.08	-.04	-.15*	-.01	-.12	-.17**	.13	-.14*	—	0.67	.47
15 系列校推薦ダミー	-.27***	-.28***	-.17**	-.04	.06	.08	-.01	.08	-.07	.25***	.02	-.17**	.22**	-.52***	0.11	.32

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 3 キャリア選択自己効力感と結果期待を目的変数とした階層的重回帰分析結果

	キャリア選択自己効力感															
	自己評価					目標選択					計画立案					
	ΔR <sup>2</sup>	ΔF	B	SE	β	ΔR <sup>2</sup>	ΔF	B	SE	β	ΔR <sup>2</sup>	ΔF	B	SE	β	
Step1																
大学 (0 = A 大学, 1 = B 大学)			-.33	.13	-.27*			-.38	.14	-.30**			-.07	.15	-.05	
性別 (0 = 男性, 1 = 女性)			.02	.08	.02			-.21	.08	-.17*			-.17	.09	-.13	
1 年生			-.35	.10	-.29***			-.38	.10	-.30***			-.14	.12	-.11	
2 年生			-.06	.13	-.04			.11	.13	.08			.07	.14	.04	
一般人試			-.07	.10	-.06			-.05	.10	-.04			-.11	.11	-.08	
系列校推薦	.07	2.82*	-.07	.14	-.04	.08	3.29**	.10	.15	.05	.03	1.30	.05	.16	.02	
Step2 大学受験経験																
努力経験			.10	.05	.15*			.21	.05	.31***			.39	.05	.52***	
受験期不安経験			-.07	.04	-.12			-.10	.04	-.17*			-.13	.04	-.21**	
結果の満足度	.02	1.93	.00	.04	-.01	.07	6.41***	.06	.04	.11	.21	19.57***	.05	.04	.09	
Step1																
大学 (0 = A 大学, 1 = B 大学)			-.28	.11	-.28*			-.17	.14	-.13			-.14	.14	-.11	
性別 (0 = 男性, 1 = 女性)			-.10	.07	-.10			-.08	.09	-.07			-.06	.08	-.05	
1 年生			-.26	.09	-.26**			-.13	.11	-.10			-.18	.11	-.15	
2 年生			.11	.11	.10			.01	.14	.01			-.10	.13	-.07	
一般人試			-.07	.08	-.07			-.20	.11	-.15			-.09	.10	-.07	
系列校推薦	.05	2.12	-.07	.12	-.04	.03	1.25	.04	.16	.02	.03	1.02	-.15	.15	-.08	
Step2 大学受験経験																
努力経験			.21	.04	.38***			.38	.05	.52***			.11	.05	.16*	
受験期不安経験			-.04	.03	-.09			-.13	.04	-.22**			.05	.04	.08	
結果の満足度	.11	9.67***	.07	.03	.17*	.21	20.64***	.03	.04	.06	.03	2.54	.00	.04	.01	

\*p < .05. \*\*p < .01. \*\*\*p < .001

かにした研究がこれまでほとんど見られない中、本研究は大学入学前の大学受験経験がその要因の1つであることを示した。

また、「結果の不満足度」は「情報収集」と負の関連を示したものの、他の4つの行動に関する自己効力感とは有意な関連はみられなかった。受験結果の不満足度がキャリア選択自己効力感にあまり影響しなかったことは、仮に不本意な入学であったとしてもそれが入学後のキャリア選択自己効力感にはそれほど影響しないことを示唆している。この結果は大学で就職活動の支援に関わる担当者にとって指導上有用な知見と考えられる。以上のことから、本研究の第1の目的は、概ね確認できたと言える。

本研究の第2の目的は、大学受験経験とキャリア選択結果期待との関連を検討することであった。Table 3から、大学受験経験の「努力経験」とキャリア選択結果期待に正の関連を確認することができた。Betz & Vuyten (1997) や安達 (2001) が、キャリア選択結果期待が職業探索意図に影響することを見出したのに対して、本研究はそのキャリア選択結果期待に大学受験経験が関連していることを明らかにした。すなわち、大学受験経験がキャリア選択結果期待を介して、職業探索意図に繋がる可能性が考えられる。

大学受験のための勉強は、高校生にとって外的に課せられている課題である。学力を向上させ、良い成績を取ることを求められ、勉強させられている状況とも言えよう。しかし、その時の経験が大学入学後の新たな進路選択場面における自己効力感形成に寄与するという興味深い結果を本研究では明らかにした。大学受験という教育活動にはより広い教育的意義があることが考えられる。このように考えると、大学入学後に彼らが打ち込んだ多様な達成経験もまた、キャリア選択自己効力感に影響する可能性がある。すでに畑野(2013)は、大学での学習動機づけと職業探索への積極的関与に関係があることを明らかにしている。今後は、大学入学後の多様な達成経験(学業や課外活動などの大学生活、留学、ボランティア、そしてアルバイトやインターンシップ)も含めて、キャリア選択自己効力感および結果期待との関係を検討することが必要である。本研究では大学受験経験、キャリア選択自己効力感および結果期待の2変数関係を中心に検討したため、これらの変数に

影響を及ぼしていると考えられる第3の変数については十分検討できなかった。今後は、大学入学後の多様な達成経験に加え、大学生の置かれている環境要因や有しているスキル、学力など、影響を及ぼす可能性のある要因を含めた検討を行う必要があるだろう。そして、本研究は一時点の調査であったことから、両変数の因果関係に言及するには限界がある。今後は両変数の因果関係をより明確にするため、縦断的方法による検討が必要である。

## 引用文献

- 安達 智子(2001). 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討—— 教育心理学研究, 49(3), 326-336. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.49.3\\_326](https://doi.org/10.5926/jjep1953.49.3_326)
- 安達 智子(2006). 大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因 キャリア教育研究, 24(2), 1-10. [https://doi.org/10.20757/jssce.24.2\\_1](https://doi.org/10.20757/jssce.24.2_1)
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Chang. *Psychological Review*, 84(2), 191-215. <http://dx.doi.org/10.1037/0033-295X.84.2.191>
- Betz, N. E., & Vuyten, K. K. (1997). Efficacy and outcome expectations influence career exploration and decidedness. *The Career Development Quarterly*, 46(2), 179-189. <http://dx.doi.org/10.1002/j.2161-0045.1997.tb01004.x>
- 花井 洋子 (2008). キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 69, 41-60.
- 畑野 快 (2013). 大学生の自律的な学習動機づけの検討——学習・キャリアの変数との関わりから—— 青年心理学研究, 24(2), 137-148. [https://doi.org/10.20688/jsyap.24.2\\_137](https://doi.org/10.20688/jsyap.24.2_137)
- 廣瀬 英子(1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46(3), 343-355. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.46.3\\_343](https://doi.org/10.5926/jjep1953.46.3_343)
- 堀井 順平(2017). 大学受験のとらえ方およびコーピングの組み合わせによる自己効力感の差異——特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感に着目して—— 発達心理学研究, 28(4), 233-243. <https://doi.org/10.11201/jjdp.28.233>
- 文部科学省(2014). 平成26年度国公私立大学入学者選抜実施状況 文部科学省 Retrieved July 24, 2022 from [https://warp.ncl.go.jp/info:ndljp/pid/11373293/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/fieldfile/2014/10/17/1352564\\_01.pdf](https://warp.ncl.go.jp/info:ndljp/pid/11373293/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/fieldfile/2014/10/17/1352564_01.pdf)
- 佐藤 舞(2013). 進路選択過程に対する自己効力と就職活

動における情報源との関連 応用心理学研究, 38  
(3), 251-262.

富永 美佐子(2008). 進路選択自己効力に関する研究の現  
状と課題 キヤリア教育研究, 25(2), 97-111. [https://  
doi.org/10.20757/jssce.25.2\\_97](https://doi.org/10.20757/jssce.25.2_97)

Usher, E. L., & Pajares, F. (2009). Sources of self-efficacy

in mathematics : A validation study. *Contemporary  
Educational Journal*, 34(1), 89-101. [http://dx.doi.org/1  
0.1016/j.cedpsych.2008.09.002](http://dx.doi.org/10.1016/j.cedpsych.2008.09.002)

(受稿: 2023.1.14; 受理: 2023.7.18)

---